

子どもの社会行動の発達を紐解き、 よりよい保育を考える

岩田恵子 研究室



研究内容

保育の場で子どもたちがどのように学び発達していくかを、社会文化的な視点、二人称的視点から捉えることを試みています。保育の場の子どもたちの学びと発達を研究していくうちに、その場をつくる保育の営みそのもの、保育者の学びと発達にも関心が広がっています。

「かかわりあい」の心理学

子どもの発達に関心をもった私が、最初に幼稚園にお邪魔し始めたときに魅せられたのは、子どもたちの遊びのおもしろさ、その中での友だちとの豊かなかかわりでした。子どもたちは、本当にさまざまな姿を保育における遊びの場面で見せてくれます。

そのような子ども同士のかかわりのなかで、注目して見ていることのひとつに「模倣」があります。ミラーニューロンの存在からもわかるように、模倣は他者理解の鍵であり、他者と世界を共有する鍵でもあります。この模倣が、保育という場で、他者と出会い、かかわりあう遊びの中で、どのように生じているのかを、エピソード記述やビデオ映像の微視的な分析により探究しています¹。



保育の場で子どもたちの姿を追いかけていると、この模倣に限らず、子ども自身がものごとのおもしろさをどんどん発見していく場面、仲間を大切に思うことが伝わってくる場面など、「子どもたちのすごさ」を発見し、おどろくことが多くあります。それは、子どもたちを外側から三人称的に眺めるのではなく、実際のかかわりの中で、二人称的かかわりあいの中で、子どもたちと出会うことができるからだと思います²。そのような「二人称的かかわり」の視点で子どもたちの世界、子どもたちの発達を探究しています^{3, 4}。

保育の質向上を現場と共に探究する

二人称的かかわりから見えてきた子ども達の世界を共有することをきっかけに、保育の質の向上を検討する研究や研修にも取り組み始めています。そのひとつに、ドキュメンテーションに関する研究があります⁵。ドキュメンテーションとは、子どもたちの日常の学びのプロセスを可視化、「見える化」するツールのひとつです。ドキュメンテーションは直訳すると、文書、記録ですが、近年の保育の分野では、写真などを効果的に用いて、一人ひとりの子どもの姿を描き出し、発信するもの全般を指しています。

このドキュメンテーションを利用することにより、保育者は、より子ども達の興味関心や行為の「おもしろさ」を発見しやすくなり、さらに、その出来事のこれまでとこれからを検討することがしやすくなります。また、子ども達の興味関心を、保育者も共に探究することとなり、保育の質の向上にもつながります。そして、このドキュメンテーションを保護者と共有することで、保護者も、子ども理解、保育の理解を深めていくことになり、保護者と園の連携もしやすくなっていきます。



この保育の質向上につながるドキュメンテーションの作成、さらには、子どもの姿を中心とした保育の記録や計画などを、ICTを用いることで、多忙な保育の中でも取り組みやすくすることができるように、(株)ベネッセコーポレーションと(株)コドモンによる「CoDMON保育ドキュメンテーション」のシステム開発や、それを用いた研修にも助言者として参加しています⁶。



CoDMON の画面例

さらに、このような写真を用いた記録を、保育の場における実習生の実習日誌に用いる試みにも携わり、学生が子どもや保育について学んでいくプロセスや、保育現場と大学の連携による保育の質向上についても検討し始めています⁷。

研究体制

研究は、主に保育の現場にて行わせて頂いています。ビデオを持って現場に入らせて頂き子どもの遊びを詳細に見てみることで、保育者と保育について、子どもについて話すこと、保育者の方にインタビューをさせて頂くことなどから多くのことを学んでいます。また、教育学部の保育・幼児教育のメンバーとは保育にかかわる幅広い情報を共有し、既に一部をご紹介したように、共同研究も行っています。学外の組織では「子どもと保育総合研究所」というかたちで、保育現場や他大学の保育者養成にかかわる方とともに、保育について学ぶ機会を企画実施しています。また、現在は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で実施が難しい状況ですが、玉川大学赤ちゃんラボでの研究も計画しています。

教育学部のゼミでは、現場で実際に会う子どもの世界を知る方法として質的な研究方法(観察、インタビューなど)を共に学び、それぞれが自分のテーマ、自分のデータで卒業課題研究にまとめています。これまでの卒業課題研究は、保育現場に関わることだけではなく、自分自身の関心のある発達心理学、教育心理学にかかわるテーマもあります。ゼミのメンバー同士では、お互い自分とは異なるテーマでも、それぞれが自分自身の体験を重ねながら、ディスカッションが盛り上がることも多くあります。卒業課題研究をまとめることで、今後の自分自身が考える基盤を作ってほしいと願い、自分自身が本当に知りたいことに取り組むことを支援していきたいと思っています。また、教育学研究科乳幼児教育研究コースも担当しています。夜間コースの利用により、保育の実践にまさに携わりながら学ぶ院生も参加することにより、保育にかかわる「理論」と「実践」を往還し、対話の中で共に学んでいます。

略歴

日本女子大学家政学部児童学科助手、助教を経て、2009年より玉川大学教育学部。2012年青山学院大学社会情

報学研究科博士課程修了。博士（学術）。専門は、発達心理学、児童学、保育学。所属学会は、日本発達心理学会、日本教育心理学会、日本保育学会、日本質的心理学会、日本認知科学会など。

参考文献

- 1 岩田恵子. (2014). 幼稚園で子どもたちが「模倣」する意味. 発達, 140, pp. 80-83
- 2 Reddy, V. (2008). How Infants Know Minds. Harvard University Press. (佐伯胖 (訳) (2015) 驚くべき乳幼児の心の世界: 「二人称的アプローチ」からみえてくること. ミネルヴァ書房)
- 3 岩田恵子. (2017). 「観察する記述」から「感じとる記述」へ: 二人称的記述から見えてくる赤ちゃんがケアする世界. 佐伯胖 (編著) 「子どもがケアする世界」をケアする. ミネルヴァ書房 (pp. 79-126).
- 4 岩田恵子. (2018). 保育実践への「二人称的アプローチ」. 保育フォーラム. 保育学研究, 56 (3), pp. 233-235.
- 5 岩田恵子・大豆生田啓友. (2019). 保育の可視化へのプロセス. 玉川大学学術研究所紀要, 24, pp. 1-13.
- 6 <https://www.codmon.com> 参照
- 7 岩田恵子・大豆生田啓友・鈴木美枝子・田澤里喜・田甫綾野. (2019). 「ドキュメンテーション型実習日誌」の試みと課題. 『論叢』玉川大学教育学部紀要 第19号, pp. 125-140.